読売 俳壇

矢島 渚男 選

崖止めといふ水仙が一面に　宝塚市　広田　祝世

【評】斜面の崩落を防ぐために水仙が植えられているのだろう。よく繁茂して、いま一面に花盛りを迎えている。確かに対象をとらえて高い描写力である。

寒月や練りたるごとく海黒き　神奈川県　大久保　武

【評】この句も練ったように海が黒いという表現に感銘した。皓皓たる月下に寒さが凝集している。

白鳥の鴨分けてゆく餌場かな　加須市　福田　啓一

【評】野鳥の餌場に集まる白鳥と鴨たち、大きい白鳥に対して鴨たちは敏捷なので、餌の分け前にあずかることができる。

まだ一人帰る子がいて雪を掻く　宮城県　梶原　京子

この峡を冬日短く通りけり　養父市　本田　修

喫水の深き船より雪放る　宇都宮市　大門とよ子

古里に原子炉七基ある寒さ　川口市　高橋まさお

大根を抱え夜道を友が来る　京都市　足立　紀子

ゴミの日が来たりて今日はもう五日　熊谷市　松葉　哲也

雑炊に餅二個入れて留守居好き　酒田市　兵田　一子

高野ムツオ 選

日の暮れて波の花のみ見えにけり　倉敷市　中路　修平

【評】厳寒の日暮れの日本海。岩礁に打ち寄せられる荒波の泡。そのさまをただ詠嘆しただけなのだが、今は、その白い泡が能登半島地震で悶え苦しむ被災者の姿にどうしても重なってくる。

雪道にキャタピラの跡ウクライナ　東京都　東　賢三郎

【評】除雪機のキャタピラの跡を通勤途上の足元に見つけた。その瞬間、侵攻されたウクライナの道に刻まれた戦車のそれが脳裏に浮かんだ。

雪積むや雪掻く人の頭に背に　高山市　直井　照男

【評】雪国の冬は雪と闘う日々の連続。その厳しさが次々と降り積む雪に端的に表現されている。

戦見て寒さの募る星々よ　寒河江市　大谷　正行

寒椿さびしくないかと問はれをり　横浜市　鈴木　基之

孫抱へ羽子板抱へ笑ふ眉　東京都　神通芙美代

大屋根に声掛け合いて雪卸し　さいたま市　加治美智子

反抗期ゆゑの眼力空っ風　栃木県　あらぬひとし

友も吾も非正規雇用初仕事　八代市　貝田こういち

狐火や村に消えゆく字小字　東大阪市　土屋　鉄男

正木ゆう子 選

ひつそりと花序は円錐枇杷の花　神戸市　大浜　義弘

【評】実ったときしか注意を引かない枇杷の、花は冬季。円錐花序とは観察が細かい。芳香があるという。今ならまだ見られるかもしれない。見て、詠んでみたくなる。

布を截つ柊の香の母の部屋　横浜市　矢沢　寿美

【評】柊も控えめな冬の花。芳香に品格があり、葉が尖っているので、「截つ」という強い動詞とともに、母上の凜とした人柄がしのばれる。

葉牡丹の渦知らぬ間に自転する　仙台市　大谷あつ子

【評】事実かもしれないが、そうでなくても、面白い句だ。なんとなく脇役的な葉牡丹なら、誰も見てない時に自転ぐらいしそうではないか。

跳ね炭を躱すことなき庵主かな　東京都　望月　清彦

千両を活けて晩年一年づつ　東京都　榎　正好

友訪はば猫に嫌はれそぞろ寒　行田市　小河原一路

トンネルを抜ければ雪のなかりけり　川崎市　折戸　洋

寒林の何かの音のとどく宿　千葉市　中村　重雄

山眠る牛伏すごとく登り窯　松戸市　早坂　哲夫

載らぬ句は集めて愛でて冬すみれ　会津若松市　佐藤　秀子

小澤 實 選

雪を踏む音朝刊の届く音　前橋市　豊嶋啓一朗

【評】かなり積もった雪を踏んで家に近づいて来る音が聞こえて、続いて朝刊が届いた音が響いた。作者が新聞を待ち、雪による不着も心配していただろうこともよくわかる。

三回で止まる不可思議わが嘘　我孫子市　森住　昌弘

【評】くしゃみをすると、かならず三回続けざまに出る。たしかに不思議だ。その一見些事に見えるものを不思議がれたのが、すばらしい。

着ぶくれて二重の袖を捲り家事　横浜市　三好れいこ

【評】寒さのため、シャツを重ね着して、家事をしている。「二重の袖を捲り」の具体性がすばらしい。だいぶ動きが鈍くなりそうだ。

叩かれて太鼓よろこぶ小六月　佐野市　高橋すみ子

初旅やアビイ・ロードを横断す　伊賀市　福沢　義男

厚切りのローストビーフ女正月　横浜市　岡　まゆみ

餅肌のぷっくりとして搗きあがる　太田市　阪本　和夫

箱買ひの蜜柑底より開ける祖母　神戸市　吉野　勝子

カップへと湯注すだけなり晦日そば　宝塚市　東耕　真

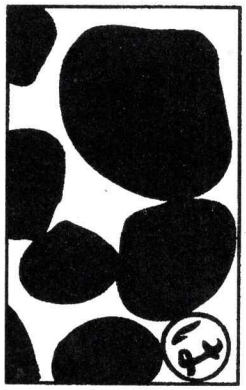
寒風にさらす身縮む露天商　松原市　中野　武則

長谷川櫂さん「四季のうた　井戸端会議の文学」刊行

俳人の長谷川櫂さんによる朝刊2面のコラム「四季」をまとめた『四季のうた　井戸端会議の文学』（中公文庫、880円）＝写真＝が刊行された。2021年4月からの1年分を収めた第16集。

在原業平や蕪村、一茶……。古典から現代までの短歌俳句や詩を短い文章で鑑賞する。巻頭エッセー「井戸端会議の文学」で、長句五七五と短句七七を交互に三十六句連ねる「歌仙」が、現代においても制作されていることを紹介。21年7月の「四季」では、小説家・丸谷才一氏による歌仙の第一句（発句）と歌人・岡野弘彦氏の第二句（脇）を取り上げている。

◆読者プレゼント　長谷川さんのサイン入り「四季のうた」を10人に贈ります。希望者は住所、氏名、電話番号に著者への一言を添え、〒100・8055 読売新聞東京本社文化部「四季」係へ。28日消印有効。



題字デザイン・イラスト　福田美蘭